

第6講 図書登録実習2, 補講1

p.59-83, 95-98

このコマで理解して欲しいこと

1. 総合目録データベースにヒットしなかった場合、書誌レコードの作成が必要であること
2. 参照ファイルのレコードや総合目録データベースの類似書誌レコードを利用することで効率的にレコード作成ができること
3. このコマは流用作成の4パターンとも新規に総合目録データベースに書誌を登録する操作であり、修正ではないこと
4. 資料現物と「基準」に照らしての編集が必要であること
5. リンク形成の仕組み
6. リンク先レコード(親書誌レコード)の作成方法

このコマの進め方

1. テキストによる説明
2. テキストの例題を全員で行う
3. 登録課題集を使った実習

<時間配分の目安>

		390分
参照ファイル・階層なし	テキストによる講義・実習	40分
	課題集実習・解説	70分
参照ファイル・階層あり	テキストによる講義・実習	40分
	課題集実習・解説	70分
リンク先レコード作成	テキストによる講義(実習)	20分
参照ファイル・出版物理単位	テキストによる講義・実習	30分
	課題集実習・解説	45分
総合目録データベースから	テキストによる講義・実習	30分
	課題集実習・解説	45分

第6講 図書登録実習2 1.書誌流用入力の手順, 2.書誌流用入力概念, 3.書誌流用入力(参照ファイル・階層なし)

p.59-67

説明のポイント

<p>p.59</p>	<p><b>1. 書誌流用入力の手順</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● この時間では、総合目録データベースに求めるレコードがなく、参照ファイルに一致レコードがある場合を想定して、書誌流用入力を行うことを冒頭に説明する。</li> <li>● 最初に流用入力全体の流れを確認する。</li> <li>● 「登録作業の直前」に検索を行うことは当然だが、同時進行で重複書誌を作成しているということもありうる。書誌を作成し、所蔵登録まで終了した後に、再度書誌検索を行い、重複書誌となっていないかどうかを確認することを習慣づけるよう説明する。</li> </ul>
<p>p.60-61</p>	<p><b>2. 書誌流用入力概念</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 流用入力とはどういうことなのか、その概念を手短かに説明する。</li> <li>● 本来、参照ファイルとは、総合目録データベースとは別のルールに基づいて作成された書誌データを、機械的に総合目録データベースのレコードに似せた形に変換して見せているものである。そのため、流用入力時には必ず、総合目録データベースのルールに基づいて、書誌の編集をしなければならない。</li> <li>● また、データ内容そのものも、常に正しいとは限らず、全てのデータについて手元の資料(情報源)で確認しながら、各データの取捨選択を決めることが重要である。</li> <li>➡ SL 教材の「目録情報の基準. 図書編」でも、記述文法、図書書誌レコードのフィールドの説明があるが、この講で初めて実際の入力を行うので、簡単に復習して次に進める。フィールドの説明(p.16), 付録1(画面構成とフィールド), 付録2(データ記述文法)参照。</li> <li>● コードについては、下敷き(クイックレファレンス)または、テキスト付録 4 にコード表(抜粋)があるので、随時参照しやすいようにしておくことを勧める。</li> </ul> <p><b>【解説】</b>  IDENT について、平成 22 年度テキスト改訂でフィールドの説明「アクセス先に関する事項」を加えた。電子ブックにのみ使用。  参照：リモートアクセスされる電子ブックに関する『コーディングマニュアル』</p>

p.62-67

### 3. 書誌流用入力(参照ファイル・階層なし)

➡ 参照ファイルについて、事前学習の復習。

p.2 ファイル構成。

p.6 総合目録データベースとの違い(①レコード間のリンクがない②所蔵レコードがない③参照ファイル自体のレコードは修正できない)。

どのような参照ファイルがあるか。

テキストの例題 2 を受講者一斉に行う。

#### 1. 検索を行う。

WebUIP の場合、参照ファイルの設定は、検索画面の右上のプルダウンメニューから選択する。初期設定は、「和図書」になっているので、洋書を登録する際は、「洋図書」に設定を変える必要があることに注意を喚起する。

#### 2. 検索の結果、参照ファイルにヒットした場合には、必ず他の検索キーでも検索してみて、本当に総合目録データベースにないか確認する必要があることを再度確認する。

#### 3. 『目録情報の基準』に従って、所蔵する資料に表示されている事項にあわせて書誌レコードを編集する。書誌登録時が、データベースの品質維持にもっとも重要であることも強調する。

#### 4. 著者名リンクを形成する。著者名リンク形成のための操作をしたが、求める典拠レコードがヒットしなかった場合の再検索の方法(検索語を変更して再検索)について説明する。

#### 5. リンク元レコード(編集中のレコード)の AL にリンク先の著者名典拠レコード ID が記入されたことを確認する。リンク形成をすることによってリンク参照ができることを伝える。

著者名典拠とのリンクについて、任意であるができるだけリンクする方向の説明にする。

#### 6. 書誌レコードを登録する前に改めてレコードの記述を確認してから、所蔵登録ボタンを押すことを伝える。この時、後で確認するために、自分が作成した書誌レコード ID を控えておくよう指示する。

#### 7. 書誌レコードは所蔵登録をクリックしたタイミングで登録されることを伝える。

(登録終了後、検索して、重複書誌が受講者数分できていることを見せるのもよい。日常的に登録直前／直後の検索を習慣づける)。

## 登録課題集 課題5-17(p.12-37)使用

- 通常は行わないが、講習会では一斉に同じ課題を実習するため、FILE指定して実習を行う。  
指定するFILEは、各課題の右ページ番号枠内に記載（その右の★は難易度）している。FILE指定はWebUIPの場合、検索画面一番下のプルダウンで選択する。第3講（目録検索）では特に説明する場面がないので、先に説明するとスムーズである。
- 自分が作成した書誌を確認する際は、控えておいた書誌レコードIDを検索画面のIDに入れて検索をすればよいことも伝えておくと、解説の時に各自で確認ができる。
- 所蔵登録までした後に間違いに気づいて、自分が作成した書誌を修正したいという受講者がいた場合は、他の人が作成したデータをいじらないように、必ず、あらかじめ控えた書誌レコードIDで書誌検索をするよう注意する。
- WebUIPにおけるフィールドの追加の操作は、ここではじめて行うので、実習に入る前に説明しておくとい。
- 稀に著者名典拠レコードを作成してしまう人がいるが、著者名典拠の双子レコードを作成されてしまうと、後からその課題を行う受講者に混乱をきたすことになる。著者名典拠レコード作成はこの講の範囲ではないから作成する必要はないこと、この講の課題にはすべて著者名典拠レコードが用意されている旨を伝えておくこともよい。
- この情報源だけでは著者名典拠レコードとリンクを形成してよいか判断できないケースもあるが、講習会ではすでに判断を行ったつもりで、リンク形成する練習と思って行うよう説明する。実際の業務では種々のツールを調べたり、内容までみたりして慎重に判断する必要があることを注意しておく。時間があれば、リンク形成を行わない場合のALフィールドの記述について言及することもよい（各目録規則の第Ⅱ部標目に準拠した形を記述する）。

## 【個々の課題についての注意点】

- 課題10は著者名典拠レコードが再検索しないとヒットしない例  
著者名リンク形成のための操作で、求める典拠レコードがヒットしなかった場合の再検索の方法（検索語を変更して再検索）について必ず説明する。この課題だけ実習前に受講者と一緒に行いながら説明してもよいし、実習のあとに補足説明として行ってもよい。
- 参照ファイルからの流用入力時の注意点は、付録8を適宜参照する。
- 以下の点はこれまでに説明していない操作・内容なので実習に入る前に方法を示しておく。  
フィールドの追加: 課題8 (PUBの2行目), 課題11(VT)

第6講 図書登録実習2 4.書誌流用入力(参照ファイル・階層あり)

p.68-72

説明のポイント

p.68-72	<p><b>4. 書誌流用入力(参照ファイル・階層あり)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● このコマでは、前の例題と同様、総合目録データベースに求めるレコードがなく、参照ファイルに一致レコードがある場合を想定した書誌流用入力を行うが、情報源にシリーズ名があるため書誌構造リンク形成を行うことが新たな事柄である、ということを予告する。</li> <li>➡ 書誌構造について事前学習の復習. p.19-24</li> </ul> <p>テキストの例題 3 を受講者一斉に行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 情報源により、レコードの形を推測する(シリーズ名があることを確認する)。</li> <li>2. 検索の結果、参照ファイルにヒットした場合には、必ず他のキーでも検索してみて、本当に総合目録データベースにないか確認する必要があることを強調する。</li> <li>3. 『目録情報の基準』に従い、手元の資料の情報源に表示されている事項にあわせて書誌レコードを編集する。</li> </ol> <p>また、記述根拠が初刷以外からの場合の注記が必要。</p> <p>解説：この注記は、レコード調整方式検討ワーキング・グループ報告書 別紙 4 に「推奨する」とあり。また、「この注記は、記述が初刷と同一であると確認した際、または初刷に基づいて書誌レコードを修正した際に削除するものとする」いわば、レコード調整における差異の目安としての注記。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 書誌構造リンクを形成する。リンク形成時の検索キーの切り出しが原因で作成されたと考えられる親書誌の重複レコードが多く見られる。求めるレコードが総合目録データベースにヒットしなければ、必ず検索キーを変えて再検索することを強調する。</li> <li>5. リンク形成後、リンク元レコード(編集中のレコード)の PTBL に親書誌のレコード ID が記入され、リンク先レコードの TR が埋め込まれていることを確認する。</li> <li>6. 著者名リンクを形成し、編集したレコードの記述を確認し、登録する。</li> <li>7. 後で確認するために、書誌レコードのレコード ID を控えておくように伝える。</li> </ol>
---------	---

## 登録課題集 課題18-31(p.38-65)使用

- ここでも流用入力の実習なので、検索はFILE指定で行う。指定FILEは、前講の階層なしの場合と同様に、各課題の右ページ番号枠内に記載で示している。

- 以下の点はこれまでに説明していない操作・内容なので、実習に入る前に方法を示しておく。

1)フィールドの追加: 課題23(PTBL)

2)3階層の記述文法: 課題24と課題25

これらの課題を1つ、講師と一緒に受講者が行う方法をとるか、1)は操作説明のみ、2)は付録2データ記述文法(p.121 PTBL)を見るように促した上で、実習に入るかはどちらでもよい。

- 参照ファイルからの流用入力時の注意点は、付録8を適宜参照する。

## 【解説】

- 受講者からの構造の種類コードについての質問が多い。

付録4コード表(p.125)を参照。カード出力を行わない館が増えた現在では、ほとんど意味がないコードであるため、まずは特に意識すべきコードではないことを説明する。受講者が自分で入力・修正する場合に、a、bどちらと判断すべきか迷うことがあるが、およその考え方として、リストを作成する場合、子書誌を使って記載する方がよい場合(例えば、親書誌が文庫、新書、出版者叢書等の時は、中の各冊のタイトルでリスト化し、括弧に親書誌を記載することが一般的)は「a」(シリーズ)、逆に親書誌のタイトルでリスト化した方がよいと思われるものは「b」(セット)とする位の説明でよい。例として課題18、20、21などは典型的なaの例。参照:『オンライン・システム・ニューズレター』No.30

なお、種類コードは入力しないと、初期値として書誌登録した時点で自動的に「a」が付与される。

## 【個々の課題についての注意点】

- 課題 24 と課題 25 が 3 階層の例。中位のタイトルを PTBL フィールドへ入力する方法を説明する。どれか1つ受講者と一緒に行うのもよい。また、階層についての説明が難しい場合には、解答例集の書誌階層図を見せるのもよい。
- 課題 24 は「2 共鳴型磁気測定」の「1」にあたるものは固有のタイトルがないので、親書誌「丸善実験物理学講座」<BA55300051>の子書誌として「磁気測定」<BA45271354>ができていることに注意。「2 共鳴型磁気測定」の書誌では、「磁気測定」が中位のタイトルになる。
- 課題 24、件名のヨミについて、分かち書きは行わない(『コーディングマニュアル』2.4.2.G5 参照)が、中黒等記号類はヨミの規則に従ってそのままをヨミとする。
- 課題 20 PHYS の「図版 8 枚」は PHISP(数量)へ。登録例で解説する場合はよいが、デモで見せる場合、PHYSI(挿図)に入れないよう注意。
- 課題 27 の解説には“目録対象資料上で確認できない ISBN は削除する”とある。新規書誌作成時には削除する必要があるが、既存書誌を修正する場合等についても、手元資料になれば削除するという意味に誤解される恐れがあるので、補足説明をする。

## 補講1 リンク先レコード作成

p.95-98

### このコマの進め方

- 補講は、テキストに記述してある全てを説明する必要はない。
- 時間に応じて、講師卓のデモだけでもよい。

### テキストに沿って説明する場合のポイント

p.95-98	<b>補講1 リンク先レコード作成</b> <ul style="list-style-type: none"><li>● ここまでで実習してきている&lt;レコード作成の方法&gt;と同一の操作方法であることを強調する。</li><li>● 著者名典拠レコード、統一書名レコードも同様の手順で、共有レコードの作成である点を説明する。講習会では親書誌レコードの例を行う。図書では書誌階層がある場合、書誌構造リンクが必須であるためである。</li><li>● 親書誌レコードはいわばシリーズ典拠にあたる概念的なもので、共通する書誌事項を記録するという基本的な考え方を理解させる。</li><li>● 講師によるデモあるいは説明のみでよい。もし実習する場合には、参照ファイルからの流用入力の実習と同様の注意（再検索、先に受講者に作成された場合の対応等）が必要である。また、ここでのポイントは親書誌レコードを作成する部分なので、操作にばかり気をとられないよう、重点をおさえる。</li></ul>
---------	---

第6講 図書登録実習2 5. 書誌流用入力(参照ファイル・出版物理単位)

p.73-78

説明のポイント

p.73-78	<p><b>5. 書誌流用入力(参照ファイル・出版物理単位)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● このコマでは、前の 3 と 4 の書誌流用入力と同様に、総合目録データベースに求めるレコードがなく、参照ファイルからの流用入力で、「固有のタイトルでないもの」により複数の出版物理単位に分かれているものを登録するところが新たな事柄である、ということ冒頭に説明する。</li> <li>➡ 出版物理単位について(p.21-22)事前学習の復習。固有のタイトルとみなさないものの表(p.21)を確認し、書誌単位について前のコマ(参照ファイル・階層あり)との違いを明確に説明する。</li> </ul> <p>テキストの例題 4 を受講者一斉に行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 情報源により、レコードの形を推測する。</li> <li>2. 検索の結果、参照ファイルにヒットした場合には、必ず他のキーでも検索してみて、本当に総合目録データベースにないか確認する必要があることを強調する。</li> <li>3. 『目録情報の基準』に従い、手元の資料の情報源に表示されている事項にあわせて書誌レコードを編集する。この操作について、書誌修正ではなく新たに総合目録データベースに書誌を作成するということを理解させる。</li> <li>4. 出版物理単位を追加する。追加する方法はクライアントによって異なる可能性があることを伝える。 WebUIP では、VOL のタグ追加を行うと、VOL、ISBN、PRICE、XISBN がセットになって、修正エリアに現れる。データを入力して、追加位置を選択し、「設定」ボタンを押す。</li> <li>5. 著者名リンクを形成し、編集したレコードの記述を確認し、登録する。</li> <li>6. 後で確認するために、書誌レコードのレコード ID を控えておくように伝える。</li> </ol>
---------	---

## 登録課題集 課題32-37(p.66-77)使用

- ここでも流用入力の実習なので、FILE指定して行う。指定FILEは、階層なし・階層ありのときと同様に、各課題の右ページ番号枠内に記載で示している。
- テキストで挙げているのは、複数の出版物理単位を登録する例だが、課題集では、「固有のタイトルでないもの」の登録に慣れることを目的としているため、必ずしも複数あるとは限らない(最初の1冊のみを登録する場合もある)。
- 参照ファイルからの流用入力時の注意点は、付録8を適宜参照する。

## 【解説】

- 受講者からは和書のケースでは、出版年についての質問が多い。

例) ハイフンで結んで記述する場合、月はどうするか?

→『コーディングマニュアル』2.2.3 F2.1に「複数の出版物理単位から成る資料の場合、出版年が2年以上にわたるときには、刊行開始年と刊行終了年を「-」(ハイフン)で結んで記録する。刊行中のときは開始年を記録し、ハイフン(-)を続ける。出版年が1年以内に収まる場合は、その年のみを記録する。」となっている。

しかしながら実際は、月まで記入されているケースが多い。流用入力の際に参照ファイルのデータの月をあれはわざわざ消す必要もないという解釈で解答例は作成している。ただし、出版年が1年以内に収まる場合は、解答例には年のみとして、「1978.5-1978.7」でも可という解説をしている。

即ち、出版月は「記録することができる」程度のことであり、解答例は一例を示しているので、記入しても間違いではない。

例) 継続中とわかっているような場合、オープンエントリー(出版開始年とハイフン)にするか?

(課題35)

→『NACSIS-CAT/ILLニュースレター』36号(2012.12.25)で『コーディングマニュアル』2.2.3F2.1の修正があった。洋図書と同様、「刊行中のときは開始年を記録し、ハイフン(-)を続ける」と修正された。

- 洋書では流用元データでISBNの説明語句(VOLフィールドの「:」の後)に入っている略語についての質問が多い。

課題37の「est」は出版予定価格(estimated priceの略)であり、CIPデータを元に作られた参照MARCにあったものと思われるため削除する。

また、複数の出版物理単位が同一のISBNを持つ場合、VOLフィールドに「: set」と記述する。これはISBNの説明語句なので、所蔵登録の時には削除する。

pbk.は出版年が違くと別書誌になる可能性もあるが、受講者からの質問がなければ特に説明しなくてもよい。

- 課題37はVOL積みで、かつ親書誌とのリンクも必要。

## 付録8流用入力時の注意点 (p.131-135)

- p.60「書誌流用入力」の図で、参照ファイルは異なる基準で作成されたMARC等をフォーマット変換したものだということをおさえた上で、具体的にどのように異なるのかを示す。
- 「NACSIS-CATでは、固有のタイトル／書誌階層の考え方を採用しているため、MARCとレコード単位が異なるケースがある」ということがポイントである。
- 必ずしも全部について説明する必要はない。参照ファイルからの流用入力のまとめとして使うこともよい。

第6講 図書登録実習2 6.書誌流用入力(総合目録データベース)

p.79-83

説明のポイント

■参照ファイルを流用することと、BOOKを流用することの違いを明確にするために、参照ファイルというものの具体的なイメージがつかめるようp.60を引用することもよい。

p.79-83	<p><b>6. 書誌流用入力(総合目録データベース)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● このコマでは、前の 3., 4., 5.書誌流用入力と同様流用入力であるが、総合目録データベースに求めるレコードがなく、総合目録データベースの類似レコードを用いて流用入力をするところが新たな事柄である、ということを目頭で説明する。</li> <li>● 版が違ったり、資料種別が異なる既存の書誌を流用して作成するケースを指しているということを説明すると、具体的にわかりやすい。</li> <li>● この操作について、書誌修正ではなく新たに総合目録データベースに書誌を作成するということを理解させる。</li> <li>● 総合目録データベースからの流用入力と書誌修正とを取り違えて操作したがために、重複レコードが作成されたり、レコードが不正に書き換えられたりするというケースは少なくない。意外におかしやすい間違いであり、絶対にこの2つを混同しないように強調する。</li> <li>● テキストの例題 5 を受講者で一斉に行う(先に登録してしまうと、総合目録データベースを検索して流用入力するという実習にならなくなってしまうので注意)。</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 検索の結果、求めるレコードがヒットしなかった場合には、必ず他の検索キーでも検索してみて、本当に総合目録データベースにないか確認する必要があることを強調する。</li> <li>2. 手元の資料の情報源に表示されている事項にあわせて書誌レコードを編集する。特に WebUIP では修正と流用のボタンが並んで配置されているので、講習会中の操作ではうっかり修正を押してしまわないように注意を促す。</li> <li>3. リンク形成に関しては参照ファイルからの流用入力と異なり、流用元の書誌レコードが著者名典拠レコードとリンク形成されていることがあるが、そのまま利用できるかどうかは慎重に検討するよう伝える。</li> <li>4. 後で確認するために、書誌レコードのレコード ID を控えておくように伝える。</li> <li>5. 最後に総合目録データベースからの流用入力と書誌修正との違いを p.83 にもとづいて改めて説明する。</li> </ol>
---------	--

**登録課題集 課題38-41(p.78-85)使用**

- 受講者により実習の速度が異なるため、スピードの早い受講者が作成した書誌がヒットし、流用元の書誌がどれかわからなくなり混乱する場合がある。ここでは、「BOOKからの流用入力の練習」であることを確認の上、流用元の書誌IDを指示すること。
- 登録課題集はこの時間中に行わず、自由演習の時間に回してもよい。
- 後で確認するために、自分が作成した書誌の書誌IDを控えておくよう伝える。

**【個々の課題についての注意点】**

- 流用元の書誌IDを指定せず、検索結果から選んで流用する際は、ISBNを検索キーに使用しないよう注意する。課題で流用しようとする別の版は、ISBNが異なるため。
- 課題40のISBNについて、ISBNの入力は必須2なので、参照ファイルになくタイトルページ裏(CIPの下)の情報源にあるので入力する(参照:『コーディングマニュアル』4.1.12)。
- 課題41は、4th ed.のpbk.や、版違いのレコードがいくつか存在するので、別のレコードを使うことも可能であるが、その際、他の受講者が作成した書誌レコードを修正しないよう注意する(BA408XXXXX以降のIDのレコードは使わないというような指示)。